

『富岳雪譜』小論

—その資料性と文芸性—

中村 誠

キーワード… 和久田叔虎 『富岳雪譜』 旅行記 山岳紀行 須山口登山道

はじめに

かつて近世の紀行文は中世以前のそれに比べ評価が低かったが、このことに対して中村幸彦は「この評価は、研究者の一種とらわれた近視眼的なものに基づく」^①と述べ、研究対象が雅文学とその流れにあるものに偏っていたことを批判した。そして俗文体で書かれた紀行の中にこそ旅の新鮮な驚き・情趣を伝える面白いものがあるとして、「面白からざる紀行文学でない、も一つの新しい紀行」を「旅行記」と呼ぶことを提言した。地理的・地誌的な資料と見なされ、文芸の側からは看過されていた「旅行記」にこそ、却って文芸的に面白いものがあるとして、そこに注目すべきことを言ったわけである。

その後、そういう視点を受け近世の旅行記にも目が向けられるようになり、板坂耀子らによってその文学性を評価しようとする仕事がなされ、近世紀行の見直しは進

んだ。しかし、山岳紀行となると依然として検討は進まず、もとよりそれは読まれる機会すら少ないのが実状で、本稿で扱おうとする『富岳雪譜』も例外ではない。

井野邊茂雄著『富士の歴史』^②は、早くに登山や信仰などの富士山の歴史を総合的に研究した文献であるが、近世の富士登山の有り様を示すものとして『富岳雪譜』からいくつかの箇所を引用している。このことは『富岳雪譜』が富士登山や地誌的事項を知るにあたった資料的価値を有するものであることを示すとともに、どのように読まれてきたかを証するものでもある。

しかし、資料的価値から離れ、紀行文学の中に位置づけ文芸として読んでみるならば、『富岳雪譜』はまた異なったものとなる。本稿は資料としての『富岳雪譜』を再検討するとともに、紀行文学として読み直し、その文芸的側面について考えようとするものである。

一 『富岳雪譜』と和久田叔虎

『富岳雪譜』は、和久田叔虎が一八〇三（享和三）年の夏、友人二人と陶山（須山）^③口から富士を登山し、洲走（須走）口へと下山、その後、足柄から小田原を経て、江戸に至るまでの八泊九日の旅を誌した紀行である。刊本はなく写本として伝わり、『国書総目録』に拠れば国立国会図書館、西尾市岩瀬文庫に所蔵がある。本稿において底本とする岩瀬文庫本は、大本三冊、八五丁、東籬園（田中菊丸）校・序、三巻から成り下巻として富士と名の付く諸国の山を考証・解説した、高田（小山田）与清撰『富士根元記』^⑤が載る。筆耕は吉川蔵六とあり、「駿河ノ駅ニシテ富士ヲ望ノ図」「富士室図」「虎杖及大薊図」など数枚の画（市川其融画）が添えられる。国会図書館本も上記の点において異同はない。

『富岳雪譜』成立の経緯は「天保八酉年霜月望日」付で書かれた東籬園による序文から知れる。それによれば、叔虎没後、東籬園がその紀行を整理編纂し『富士根元記』を加え一書としたというもので、書名も東籬園によって変えられている。『富士根元記』が加わることで「譜」としての性質を持つこととなったからだろうが、この年には鈴木牧之の『北越雪譜』初編三巻が世に出ており、『富岳雪譜』命名に影響を与えた可能性も考えられる。

ただ『富岳雪譜』は特に「雪」に関わる内容ではない。

叔虎には他に『富士紀行』（自筆、乾々斎文庫旧蔵）^⑥があるが、一度の登山から二種の登山紀行が書かれることは考えにくい。『富士紀行』の所在が不明のため推測するしかないが、『富岳雪譜』の中核となる上巻・中巻の登山紀行部分が『富士紀行』だったのではなからうか。本稿で『富岳雪譜』と呼び論述の対象とするのは、厳密にはその上・中巻にあたる叔虎による紀行部分ということになる。

著者の和久田叔虎は、漢学者・医者。一七六八（明和五）年生、一八二四（文政七）年没。名、寅。字、子青・叔虎。号、意伸。その経歴については『国書人名事典』には「遠江浜松藩士。寛政八年（一七九六）二十九歳で皆川淇園に入門して漢学を学び、京阪で活動した」とあるばかりで多くを知りえない。

医学においては漢方を学び、触診・打診して病状を探る腹証（腹診）を研究した。中国ではほとんど無視され発展しなかったという腹証だが、日本のそれは禅僧夢分に始まり、吉益東洞の研究を経て独自の発展を遂げたという。そして、東洞の流れをくむ鶴泰栄へと継承され、その教えを受けた稲葉文礼へとつながっていく。叔虎は文礼と共に当時の腹証研究の中核にあった人物で、文礼

の弟子であり盟友でもある。医を志したのは「幼児にして父をうしない、病身の母を看病するうちに、近隣の医者が頼りにならない」と感じたからだという。その方面の著書としては『読腹証奇覽』（写本）ほか、『腹証図解』（写本）、『徳本翁十九方対証通覽』（一八〇四〔文化元〕年）、『腹証奇覽翼』（一八〇九〔文化六〕年）がある。『腹証奇覽翼』は「古籍を精究して学・術を兼ねた書」として現在でも評価されている。

漢学については皆川淇園のみならず、海保青陵からも学んだようで、漢学方面の著書はないものの、その素養は『富岳雪譜』の文章にも反映している。『富岳雪譜』は漢字仮名交じり文ではあるが、その達意の文章は「文」の人としての叔虎の真面目を示している。

人柄は推測するしかないが、『富岳雪譜』に現れる友人たちとの忌憚ない交遊から、人づきあいに長けた大らかな人物だったと想像できる。医学・漢学双方の分野で人脈は豊富であったに違いなく、西園寺（京都市左京区）の「和久田敬簡先生墓」と刻された墓石には「門人謹建」とあり、弟子達からも慕われていただろうことが伝わる。

二 富士登山と行程の概略

『富岳雪譜』は「享和三癸亥ノ夏、余将二東都二下ン

ト、浪華ノ小橋某、浜村某、東都ノ八橋庵ノ主人トヲ伴ヘリ。葉月^①十一日二遠州浜松ヲ発シテ、同十三日駿州吉原ノ駅ニ至ル。炎暑ノ旅行ナレバ一入困憊シテ客舎ニ着ケリ」と始まる。これに従えば旅の目的は東都に下ること、もともと富士登山が計画されていたわけではないことになる。吉原の宿で湯を浴びて晩食の後、主から「頃日数日、雨フラスズシテ暑熱頗ル益レリ。行旅ノ労モ嘸ト思ヒヤラヌ。サレドモ此ノ辺ノ人ニテハ、又別二一ツノ喜ベル事アリ。富士ニハ詣ルモノ雨ニ逢ノ患スクナシ。今日モ終日、富岳ノ雲ナキヲ眺玉フラン」との話を聞き、富士山に登る気持ちになったというのである。友人三人のうち「肥テ蹢躅タリ」という八橋庵は登らぬ意思を示したが、「謀ハ多ニ従ベシ」ということで他の三人は登山することとなる。

翌十四日、一人江戸へ向かう八橋庵と分かれ、叔虎、小橋、浜村の三人は「導先^{アシナイ}ノ人」を雇って陶山へと向かう。三保ガ崎、千本松原、駿豆の海などを眼下にしながら富士の裾野へと入り、十輪木（十里木）に到着し弁当を開く。吉原からここまで五里。十輪木より二里で戸数も多い陶山に到着。御師の家で強力を雇い登山の準備を終え、「日暮ニ近ケレバ早立出ベシトテ、御師ニ別ヲ告げ先を急ぐ。細雨の中歩を進め、陶山から二里の駒還の

小屋に到着し、しばらく休憩。林中に入る頃には既に日も暮れ、微雨も止む。十四夜の臘月に樹間をたどり行き、初更に林と本山との境である沙振浅間に到着、この間一里。この沙振に浅間神社の別当寺があり、入山料に当たる山役金を徴収される。夜間登山にもかかわらず叔虎は疲れ知らずで、足の弱い同行者を尻目に一人快調である。二時ばかりして二合目の岩室に行き当たると、弁当を食べているうちに三更となり、この岩室で仮寝することとなる。

十五日、黎明が近くなり、日の出を拝そうと岩室を出る。三合目・四合目を過ぎ半腹に至る頃、夜も次第に明けはじめ、陽が昇ろうとする頃に五合目に着く。日の出を待つが雲が天際に横たわって太陽は見えない。やがて四方が開けて、「豆相甲ノ三州」の山々、「駿豆相ノ海」などが一望でき、「孔子泰山ニ登テ天下ヲ小ナリトシ玉ヘルトイフ事、於レ是解シ得タリ」と感嘆する。

五合目以降、いよいよ険しい登りとなり、一行は「^{スナ}麓砂」に苦戦する。未の上刻に八合目の窟屋に到着する。ここで新しい履に履き替えるなど体勢を整え、険阻な道を登り始める。申の上刻に頂上到着。金剛水^②で喉を潤す。最高頂剣ノ峯は前夜に降った雹がまだ消えていないというところで登るのをやめ、薬師ガ岳に登る。この石窟で泊

まろうとするが、主人から山嶺の寒気は耐えがたいとの忠言を聞き、洲走口を下山し六合目で宿す。

十六日、天候悪く日の出は見られない。五合目で吉田口との道を分け、「走り路」を一気に降り午刻に洲走の宿に到着。この日は「富士ト足柄ト打合タル谷間」にある竹下で泊まる。

十七日、足柄山を越え関本宿を通過し、最乗寺の道了宮を詣で、小田原で宿泊。

十九日、東都に着き、三日前に帰宿していた八橋庵と再会を果たす。

これが九日間の行程の概略である。中巻の末尾には「附録」として、各地から見る富士の景色についての短評が載る。

三 『富岳雪譜』の資料的価値

叔虎が書き留めた分野は、地学・動植物・地誌・民俗など多岐にわたる。宝永の噴火で焼け焦げた形の怪しい黒い石、休憩に際し足を濯ぐために差し出されたのが桶ではなく全木槽^{マルキブネ}だったということ、富士室（石室）で販売される物品名、山中での水や薪の調達方法、山中に生える大薊や虎杖のこと、石室で食べる鬼薊の根の煮物について等々、好奇心旺盛なフィールド・ワーカーは自身

の目で観察し、また多くを聞き取っている。

序において東籬園が「富士一山の事ハ巨細にして見に足り」と評価したように、富士山を多方面から記述しており、書き残したものは享和年間当時の富士登山の様相を伝える貴重な資料となっている。『富士の歴史』において井野邊が頼ったのもここに理由がある。

また、富士講の登山では主に吉田口登山道、須走口登山道が使われ、須山口登山道、大宮・村山口登山道を利用した登山記録は少ない⁽¹³⁾ということ、宝永地震で壊滅した登山道が復活して間もない頃の様子を伝えるということ、そういう資料の希少性という点においても価値が認められる。以下でいくつかの事項を見てみる。

浅間神社の別当がある沙振の箇所では、「沙振」の地名に興味を持ち、富士山の砂土を余所に持ち出さないために、下山にあたって衣服や草鞋に付着した砂石を振り払う場であったところからその名がついたとの由来を聞き出している。このことに関しては、下山に使った須走口登山道でも、同様に林と本山との境に沙振浅間があったことを記している。富士山においては聖なる領域と他を隔てる明瞭な境界意識があったことを教える記述である。叔虎は、このような富士にまつわる習俗・慣習について特に関心が深かったようで、ここで山役銭が徴収される

こと、金剛杖・紙符が売られていることなども書き留めている。

紙符について「二便ノ不浄ヲ祓為ナリトテ、紙符ナドヲ与テ銭ヲトル」と叔虎は記す。このことに関しては、須走口から登山した池川春水の『富士日記』にも「人々大小便するに紙を地にしき其上にす。故に麓の小屋或御師方杯にて紙を賣⁽¹⁴⁾」とあり、また大宮・村山口から登った原徳斎の『富嶽行記』にも同様のしきたりが記されている。⁽¹⁵⁾このことから大・小便を大地に触れさせないというのは、いくつかある登山道に共通する習俗であったと知れる。⁽¹⁶⁾砂を聖域外に持ち出すことを禁じた「沙振」の事例とともに、富士山の土地自体を聖なるものと見る意識があったことを示している。

また、随所に現れる主体的な人間像からみて、「与テ銭ヲトル」という書きぶりには、不浄を祓うことを口実とした商売ではないのかという批判を読むことができる。事実の報告の合間に、時に自己の意見・考えが現れるのも『富岳雪譜』の面白いところである。

叔虎が見聞した事項をよく書き留めたことで、我々は近世の富士山の諸相を知ることができるが、注意を要する点もある。井野邊は『富士の歴史』において、須山の御師の家で山役銭を徴収されたとある『五山驛程見聞雑

記』(作者不明、一八三八〔天保九〕年、写本)の記述と、沙振浅間だと書く叔虎との違いを指摘している。井野邊はそれを時代による相違として理解しようとしたが、叔虎の情報と他が異なる場合は他にもあり、その信憑性には留保すべき点もある。

石室に関して「一合二一窟、或ハ二三窟アル処モアリ。陶山ハ上ル人少キユヘ、八合マデニ僅二三窟アリ」と記す。しかし、今日の研究者は、噴火以前は一合目から九合目まで各号目毎に九つの石室があり、噴火後は二・四・五・六・八合目の五カ所となったと報告する。「八合マデニ僅二三窟」というのは、登山道が復興してまだ早い段階だったからなのか、記憶違いだったのか、やはり疑問のある箇所である。陶山口登山道の特殊性を過剰に言おうとする気持ちが反映したのかも知れない。

また、五合目の石室の箇所では、中道廻りの有様や水の調達方法などのことを記しているが、井野邊は中道廻りについて、須山口は六合目の下を通るとしているし、噴火以後に描かれた「富士山須山口略絵図」⁽²⁰⁾でもそれは六合目を横切っている。自然災害などで道が変わることもあるだろうが、ここも留保すべき記述である。「此丘ノ半腹ヲ帶ヲスルガゴトク、横サマニ周回スル事也トゾ。七日ナラザレバ周回スル事能ハズ。其間石窟ノ宿リ

ナクシテ露宿スル事三夜、真ノ大丈夫ナラザレバ之ヲ周回スル事能ハズ」との記述も、七日を要して露宿が三夜とは矛盾がある。中道廻りは「行程十三里、一泊二日の修行」⁽²¹⁾とされるもので、石室の人がその厳しさを過剰に話したのか、叔虎の記憶違いがあったのか、ここでも具体的な数値の正確さについては留保すべき点がある。

叔虎の記載した事項を無条件に受け入れることはできない。しかし、具体的な数値やいくつかの記述において再検討は要するものの、情報の多さと希少性は『富岳雪譜』の資料的価値を減ずるものではない。

四 登山者としての叔虎

冒頭に記された富士登山を思い立つ経緯はいささか唐突である。富士山に登ろうとするならば、それなりの準備や心構えがあろうというもので、事実は出発時から計画されていたのではなからうか。

後に見るが、登山に際し強力から「草鞋」を用意するよう指示されたにもかかわらず、叔虎はそれを拒み「草履」を選ぶという箇所がある。「他ノ山ノ例ニナラフノミ」という理由からだが、このことは叔虎が富士山以外の山に登っていることを意味する。また、巻末の「附録」には「余諸国ニ遊歴スルノ間、山水ニ遊ノ癖アリテ、足

跡ノ至ル所ハ嶮岨トイヘドモ適ザル所ナシ」とあり、叔虎が何度も登山を経験していたことがわかる。健脚を誇る叔虎は元来が登山好きだったと見るべきで、遠州のそういう人物が富士登山に関心を持たないはずはない。

稲葉文礼との出会いも富士山への登山欲を刺激した可能性がある。一七九三（寛政五）年、文礼は甲州を漫遊し、その際富士登山を行っている。『腹証奇覧』の序には「壬子の歳、甲州に遊び、富嶽に登つて塗を失し、黒川の里の禪院に投宿す」とある。その際、黒川で知足斎徳本なる人物の遺書を手に入れた文礼は、その翌年、甲州からの帰途に叔虎と出会った。文礼は叔虎を腹証研究の同志だと認め、浜松に数ヶ月留まった。その間、二人が話題にしたのは無論腹証のことであつただろうが、知足斎の遺書を手に入れた経緯を話す際に、富士山での途迷いの体験に触れないわけはなく、富士登山の話題も当然出たはずなのである。

また、登山する三年前の一八〇〇（寛政一二）年が富士登山のご縁年となる庚申年であつたことを考えると、そのことも叔虎の登山欲を刺激したと想像される。それらの事柄を考えるならば、叔虎らの旅は元々富士登山を予定したものだったと捉えるべきで、吉原で宿の主人の話を聞いて俄に富士登山を思い立つというのは、紀行を

書くにあつた設定だった可能性も考えられる。

仮に富士登山が本当に予定外のものだったとしても、「他ノ山ノ例ニナラフ」という文言やその他の記述から、叔虎が既にいくつかの登山を経験していたことは確かである。叔虎は富士山をどのように捉え、どのような登山をしたのだろうか。叔虎の登山者像について見てみる。

『富岳雪譜』の中で印象に残る場面に、陶山の御師の家で登山準備をする際の強力とのやりとりがある。叔虎の富士山に対する見方と強い個性が現れていて興味深い箇所、後に述べることも関わるので、やや長くなるがその場面を以下に引く。

「強力来テ曰、各草鞋十足ツ、ヲ齎ザレバ、登降ノ用ニアツベカラズト。小橋、浜村ノ二子ハ之ヲ聞テ、各草鞋十足ツ、ヲ買求タリ。余ハ独旅行ニ草鞋ヲ好ザレバ、常ノ草履六足ヲ買テ、他ノ草鞋十足ノ用ニアツベシトイヘバ、強力ガ曰、客ハ数此岳ニ昇ルヤ、且初テナルヤト。余曰、今ヲ初トス、此岳ノ嶮易ヲ知ラズ、只他ノ山ノ例ニナラフノミト。強力ガ曰、三国第一山ト標題シタル峻険ヲ昇ニ、他ノ山ノ例ニヨルベキヤ、況ヤ平地ヲヤ、衆人ノ所^{オヤメ}レ為ニ随ヲ可トスト。余ガ曰、其好ム所ニ從ン、艱^{オヤメ}ルトモ汝ノ足ヲ仮ズト。強力曰、靈岳ニ昇モノ強言ヲ禁ズ、客ノ如キ初登ノ人ニシテ敢テ先達ノ辞ニ從ザルハ

強トイフベシ。然ドモ客吾言ヲ用ザルベシ、但路嶮ニ足
疲ルトキニ及テ、始テ吾忠言ヲモ思ヒ悔心ヲモ懷ベシ。」

こういうやりとりの後、叔虎はあくまで自身の主張に
従って「草履六足」を買う。ここにははしなくも強力と
叔虎との間での富士に対する意識の差が露呈している。

強力にとっては富士は三国一の山であり、神聖極まりな
い霊岳と認識される。そういう富士を崇める気持ちが峻
険さと登山の困難さを強調する態度へとつながる。一方、
叔虎には富士への憧れはあるものの、それはその美観や
高さに対してであり、霊的な山として崇め特別視するか
らではない。数ある山の中の一つだと捉え、登山の困難
さなどについても他の山と変わらないと考えている。叔
虎にとっては富士は特別な山ではなく、あくまで山の一
つという認識であり、決して信仰的な対象にはなってい
ない。富士講による信仰登山が隆盛を極める近世後期に
あって、叔虎のそういった登山姿勢は独自のものではあ
ったというべきだろう。

叔虎の登山は、山中で目にするもの一つ一つに興味を
持ち、植物や昆虫を観察し、風光を愛で、仲間と語らい
ながら登るというもので、まさに今日の我々の登山と変
わらないものがある。住谷雄幸は叔虎の山頂での行為に
対して、「信仰登山では、山頂で声をたてたり、石をな

げるとは、山神を怒らすものとして禁じられているの
に、タブーを恐れぬ叔虎の態度は、山登りそのものを楽
しむもので、近代登山を考える上で興味深い」と述べた。
近世までの登山を宗教的な動機に基づくものと捉え、日
本の近代的登山はウォルター・ウェストン以降に根付い
たと理解されがちだが、叔虎には既に近代的な登山観が
芽生えていたのである。

近世以前の登山と近代のそれを宗教登山か否かで分け
る基準は、そろそろ払拭されなければならないのだが、
未だにそれができていないのは、近世の宗教登山以外の
登山を知る機会が少ないからである。江戸時代には山林
巡見、採葉、測量など、仕事として山に登る者がいたが、
彼等の中には山中に入ることを通して山の面白さを知り、
登山自体の楽しみを知った者がいたに違いない。熊原政
男は採葉記を登山史料として活用したが、それらには登
山する者の心性、どのような気持ちで登山し何を感じた
か、そういう個人の思いまでは書かれていない。また、
無名の登山者も大勢いたことだろうが、彼等は叔虎のよ
うに書き残すことはない。

宗教登山ではない登山の有り様があったことを知るに
は、書き残された紀行に頼るしかない。『富岳雪譜』は
それを教える貴重な山岳紀行でもあった。

五 文学としての『富岳雪譜』

さて、本節では紀行文学としての『富岳雪譜』について、叙景、虚構的側面、構造などについて考えてみたい。まずは叙景についてであるが、早くに『富岳雪譜』を紹介した小林義正は、「炬火をかざしての夜登記録で叙景も秀れている」とそれを評価している。ただ、具体的に論じられていないので、例を引きつつ検証してみたい。以下は五合目からの眺めの描写である。

「日ノ升ニ随テ下界益分明ニシテ、裾野ノ色萌黄ニ染タルゴトク、東北ニ聳タル衆山ハ豆相甲ノ三州ヲ一望ノ間ニ連テ、其鮮明ナル事、掌ヲ視ガゴトクナリ。」

「南ニハ駿豆相ノ海水鏡面ノ如ク武房総ノ海ニ連、遠クハ烟霧ノ中ニ入テ明カナラズ。(中略)煙中ニ蓊鬱タルハ東都億万ノ人戸ナルヲ知、遠近ノ美景天際ヲ限リトシテ、山河ノ隔ヲ客レズ。」

小林義正は形容や美文的な筆致を認めたのだろうが、「海水鏡面ノ如ク」の比喻は常套的であるし、天際と山河が溶け合う様を言うのも、李白の七絶「黃鶴樓送孟浩然之広陵」を思い起こすもので、ともに典型を借りての表現だと言わざるを得ない。叔虎の叙景に独創的な表現はなく、評価すべきは地理的関係を踏まえた忠実な写実にあるというべきだろう。叔虎は風景を捉えること、描

くことに一言を持っている。中巻末尾の「附録」には次のようにある。

「古今ノ画ニ名アル人ノ描ケル所ノ富士ヲ見ニ、多クハ前蹟ヲ襲テ実景ヲ真写スルモノ少シ。如何トナレバ、画ニ名手ナリトイヘドモ、足跡ソノ地ニ至ラザレバ、徒ニ之ヲ写ス事能ズ。」

「近ゴロ百富士ノ勝景ヲ真写スルモノヨミル、尤此岳ヲ望ノ変化ヲ尽セリトイフベシ。然レドモ猶遺漏ナキニアラズ。」

現地に行き自身の目で実際に風景を見なければ、真の風景画は描けないというのである。ここで言う「百富士」は時代から見て河村岷雪のものだろうが、岷雪は自身の足で各地を廻り実景にあたって富士を描き、狩野探幽以下の描く富士を実景に即していないと批判した。叔虎はその岷雪にも満足していないのである。叔虎の場合は文筆によってであるが、科学的な眼差しで地理的位置関係・方位・遠近・形状などを正しく捉え、緻密に写実する、叔虎はそこに叙景の神髄を求めた。同時代人である司馬江漢は『西洋画談』（一七九九〔寛政一一〕年）で、西洋画における「写真」の画法の優位を説いたが、その絵画論と叔虎の叙景についての考えは近い。

写実に拘り現場での実景を真写することは、それぞれ

の場合の風光の差を明確にすることになる。叔虎には各地域・場を持つ固有の風景を尊重し、風景の差異を楽しむとする精神があるようだ。紀行の末尾で江戸からの富士の遠景を愛でたのも、「附録」で各所から眺める富士の景色について論じたのもその現れである。

次に虚構的側面について検討したい。先に叔虎が強力の助言を聞き入れずに「草履六足」を買ったという箇所を引用したが、この件は後の場面につながる伏線となっている。五合目以降、山は急峻となり「昇ル足ニ踏崩ス塵砂、草鞋ノ間ニ入テ歩ヲ艱ス事甚シ」という状況となるのだが、草履を履いていた叔虎のみその難を免れる。そして、叔虎は「草鞋ヲ買ザル強言ハ、此アタリニテ思ヒシル事ヤ、如何ニ」と軽口をたたき、強力を揶揄する。この場面を活かすには、強力と叔虎との意見の相違を先に強調して書いておいた方が効果的である。二人のやり取りは芝居じみており、事実からは誇張され変形されているに違いない。

砂と履物に関わる記述は、下りの「走り路」といわれる砂地の道を駆け下る場面にも現れる。

「走り路トイフハ、是亦天下ニ比類スベキナキ路ニシテ、山ノ勾倍ハ階梯ヲカケタルゴトキ峻削ノ所、石骨ナキ沙山ヲ直下ニ踏サゲ、瀧ニ乗テ下ルトモイフベキ勢ヒ

ニテ、瞬目ノ間ニ数里ノ山ヲ走り下ルヲモテ、走り路トハ名ケタリ。」

「走り路」を駆け下りるにあたって、叔虎は五合目の石室で身捲えをし、草鞋二、三足を重ね履きする。

「草鞋二三足ヲ重テク、リツケ、初一步ヲ進レバ、足沙中ニ没スル事尺アマリ。沙トモニ踏崩レ下ル事一丈バカリ、此勢ニ乗レバ、足ノヌキサシスル事隙ナク、只足下ニ力ヲ入ルバカリニテ、顛仆突蹶ノ恐モナク、誠ニ空中ヲ下ル心地シテ、夢カト思フ間ニ残惜クモ巔ヲ雲間ニカクシテ、暫時ガ程ニ二合目マデ降り到リヌ。」

快調に下山する様が叔虎の気分に合わせて軽快なりズムで記されていく。しかし「草鞋二三足ヲ重テ」とはどういうことなのか。下山では足首に固定できる草鞋がふさわしいのはわかるが、陶山で「草鞋十足」ではなく「草履六足」を買ったのではなかったか。頂上を目前にした場面でも「件ノ草履バキニテ、平地ヲ歩ガゴトク」登っていたのではなかったか。上りでは「草履」だったから砂の難から逃れられ、下りでは「草鞋」を重ね履きしたから砂地を快活に滑り降りることができた。注意すべきは、「草履」がいつの間にか都合よく「草鞋」へと変わってしまったことである。

強力に耳を貸さなかった場面、「草履」履きのおかげ

で砂の難から逃れられた場面、快調に「走り路」を下りる場面、これらの箇所には叔虎の人間味と登山の醍醐味がよく現されている。読んでいて楽しく、叔虎の心と登山の様子を鮮やかに思い描くことができる箇所、紀行の要点である。

現在では富士山に登った経験がない者であっても、登山は映像等を通して既に体験されたものとしてあるが、江戸後期にあつては一般には登山の有様をイメージすることは難しかったはずである。板坂耀子は近世の山岳紀行の特徴の一つとして「冒険家として自己を演出表現する作者の姿勢⁽²⁶⁾」を挙げた。叔虎も冒険ぶりを誇示するかのように誇張して書くが、それは富士登山の様子を読者に伝えよう、面白い読み物を提示しようとするサービスピ精神からである。先の論理的な破綻は、読者を意識し面白い作品を創造しようとするところからくる勇み足だったのではなからうか。

『富岳雪譜』は勝れて記録的な書き物ではあるが、一方で脚色を越えた創作的・虚構的部分を有する作品だと理解すべきである。富士登山を思い立つ動機や八橋庵一人が先に江戸に向かい皆を待ち受けるというのも、興味深い展開とするため事実を変形させたところがあつたと考えられる。

最後に『富岳雪譜』の二重の構造について考えてみたい。『富岳雪譜』の文芸面に關しては、先述した小林義正の叙景の評価や、板坂耀子による「あらゆる方面から富士にせまっている。傑作の一つである⁽²⁷⁾」、住谷雄幸による「信仰登山にとらわれず、自由闊達な登山ぶりが巧みな文章で表現されており、山岳紀行文としても秀逸なものと思う⁽²⁸⁾」などの評価がある。しかしこれらは『富岳雪譜』の文学性を認めながらも、「登山記」としての側面ばかりに目が行き、紀行全体の構造を捉えたものではなかった。端的に言えば、今まで『富岳雪譜』はその半面しか読まれてはいなかったのである。

『富岳雪譜』は富士登山の場面が重要な位置を占めるというのは論を俟たないが、登頂時の様子はそれほど感動的に書かれているわけではない。頂上場面ではお鉢と呼ばれる内院や建造物、あるいは眺望について精しく書かれるものの、登頂の際の記述は「此ヲ過レバ程ナク山ノ巔ニ登リヌ。時ハ申ノ上刻バカリナリ」と実に淡々としている。『富岳雪譜』は記述の緻密さにはそれぞれの場面で濃淡はあるものの、上巻で山頂までが描かれ、中巻では下山から東都に至るまでが描かれる。登頂までと登頂以降の記述が量的に同じ配分で書かれており、下山以後と江戸到着後の記述を軽く見るわけにはいかない。

『富岳雪譜』は浜松から江戸へと至る道中記を外枠として、その内側に富士登山記を組み込んだ、二重の構造から成り立っているのである。『富岳雪譜』の妙味はここにあり、外枠に描かれた事柄の起結を読まなければ、紀行全体を読んだことにはならないのである。

洲走へ下山した一行は、足柄山、関本宿、最乗寺、小田原等を経て江戸に到着し、三日前に着いていた八橋庵と再会を果たす。そして八橋庵に迎えられた一行は、旅の終わりに富士を愛でながらの酒宴を開く。旅のはじめで八橋庵一人が東都に向かったのは、この紀行の首尾を整えるためには必要な展開だったのである。再び八橋庵を加えて、紀行の記述は富士登山に変わってその観望場面へと変わる。富士登山を描く場面では八橋庵の存在は消えていたのだが、彼は富士山を眺望するには絶好の地に建つ「八橋庵」の所有者で、この紀行において欠くことのできない存在だったのである。

酒宴は旅の疲れを慰労するものであり、登山を振り返りながら富士を眺めるというものである。しかし、そういう登山行為に付随したものである以上に、江戸から富士を眺めその景観を愛でる、そのこと自体のためのものだったのではなからうか。紀行の記述に従えば、富士登山を終えた後に江戸に立ち寄ったということではない。そ

もそもが富士登山のための旅ではなく、「東都へ下る」ための旅だったのである。だとするならば「望芙蓉ノ第一」たる八橋庵から富士を望むこと、このこと自体が一つの目的だったとみるべきである。

富士山を遠望する箇所は分量的には短い記述に過ぎないし、富士を登山する場面に比べれば、陰に隠れがちな場面である。しかし、『富岳雪譜』という紀行文学は、富士登山を終えた叔虎一行が江戸で八橋庵との再会を果たし、四人揃って富士を眺めながら宴を催す、その大団円に向かって記述するように構想されたと考えるべきで、最終場面は決して補足的な事柄ではない。登山記として読んでいるうちは富士は登山の対象としてあったが、最後にはそれは眺望の対象へと変わった。『富岳雪譜』においては、富士を遠望すること、眺めるものとしての富士、これもまた一つの主題だったのである。

最後の場面では叔虎は登山したことの感動から一旦は離れ、「天晴テ一点ノ雲ナク西ニ望メバ、思ハズモ亦富岳ノ遠景目ノ前ニ映ジ」と、方角・遠近を明確にして冷静に景を叙し、「八橋庵ハ、東一石橋ノ北ニアリテ三文字舎テフモノニテゾアリケル。八橋ハ則、呉服橋、鍛冶橋、常磐橋、銭亀橋、道三橋、一石橋、日本橋、江戸橋ヲ合シテ八橋ナリ。都下市中ニ於テハ、此楼ヲモテ望芙蓉ノ

第一トハイフベキ也」と紀行を結んだ。八橋庵という場は八つの橋と富士山とを同時に視界に入れることができる、唯一無二の場であり、この場から眺めることこそに意味があったのである。叔虎らが富士を眺めてほぼ半世紀後、歌川広重は同じように一石橋の畔から富士を望み、『名所江戸百景』第六三景の「八ッ見のはし」を描いた。

その絵には、左隅に一石橋の欄干がわずかに覗き、銭亀橋の向こうに江戸城、遠景には富士が描かれている。

『富岳雪譜』は、山中で出会った人との出来事を劇的に再編して描いたり、自身の人間性をあえて際立たせたり、登山行為を迫力あるものとして描いたり、読者を強く意識した読み物として創造されている。また、富士登山の面白さだけでなく、巧みな構成を駆使することで、眺望としての富士の魅力も描いている。叔虎は単に登山の事実を記録しようとしたのではなく、文芸として耐え得るものとしてこの紀行を書いたのである。

おわりに

紀行とは本質的には旅において現実を起こったことを記録するものだが、それを書く行為には文芸を創造しようとする契機が潜んでいる。『奥の細道』は記録することより、文芸としての完成を選んだ。記録することに十

分であっても、文芸には至らないものもある。『富岳雪譜』は紀行の本質たる記録性を十分に満たし、かつ文芸としても評価し得る作品だったのではなからうか。

近世の山岳紀行の可能性を開くのはこれからである。

*『富岳雪譜』の底本は西尾市岩瀬文庫所蔵本に拠った。引用にあたっては適宜、句読点・濁点を施し、ルビは一部にとどめた。また、旧漢字は新漢字に改めた。

注

(1) 中村幸彦「近世圏外文学談」『中村幸彦著述集』第三卷、中央公論社、一九八四、七三〇一頁。

(2) 『富士の研究』(全六巻、浅間神社社務所編、古今書院、一九二八・一一―一九二九・三)の第一巻。

(3) 『富岳雪譜』では「陶山」「洲走」と表記される。今日では一般に須山・須走であり、本稿では叔虎の表記と一般的な表記が混在する。

(4) 信州大学附属図書館には小林義正旧蔵(高嶺文庫)本(大正期の写し)の所蔵がある。

(5) 一名『國鎮記』、『富士根元記』自体は一八一七(文化一四)年の刊行。

(6) 『国書総目録』に載るが、現在の所蔵先は不明か。

(7) 『国書人名辞典』第四卷(岩波書店、一九九八・一一) 七九六～七九七頁。

(8) 松田邦夫「稲葉文礼と和久田叔虎」(大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』第八三卷、名著出版、一九八二・二) 一五頁。

(9) 松田邦夫、前掲論文、二二頁。

(10) 青柳淳子「海保青陵の伝記的考察」(三田学会雑誌) 第一〇二巻第二号、二〇〇九・七) 二二三頁。

(11) 「葉月」は誤りで、内容からみて「水無月」。

(12) この場にあるのは「銀明水」だろう。井野邊茂雄は前掲書において、富士の二名水として金明水・銀明水を挙げている。現在も同名のまま存在。

(13) 井上卓哉「登山記に見る近世の富士山大宮・村山口登山道」(富士山かぐや姫ミュージアム館報) 第三二号、二〇一七・八) 七八頁。

(14) 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一編『日本庶民生活史料集成』第三巻(三一書房、一九六九・一) 三七七頁。「ママ」の記載は同書に拠る。

(15) 井上卓哉、前掲論文、七三頁。

(16) 井上卓哉は前掲論文において、山中での排泄作法に関して、大宮・村山口から登った原徳斎と須走口から登った池永春水に共通の記述があることから、山中を汚してはなら

ないという認識が共有されていたとした。須山口を登った叔虎の記述はこの説を補強することになる。

(17) この箇所「僅二三窟」とも読み得る。

(18) 菊池邦彦「富士山信仰における須山口の位置」(裾野市史研究) 第一三号、二〇〇一・三) 五六～五九頁。

(19) 井野邊、前掲書、三四五頁。

(20) 裾野市立富士山資料館蔵

(21) 岩科小一郎『富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰』(名著出版、一九八三・九) 四二五頁。

(22) 大塚敬節「稲葉文礼と和久田叔虎……腹診の伝承……」(日本東洋医学会誌) 第一二巻第二号、一九六一・一一) 中の書き下しに拠る。一二頁。

(23) 住谷雄幸「江戸期の富士登山にかんする二つの写本——『隔搔録』と『富岳雪譜』——」(参考書誌研究) 第一四号、一九七七・三) 一〇頁。

(24) 熊原政男「登山の夜明け」(朋文堂、一九五九・五) 一九～二〇頁。

(25) 小林義正『山と書物』(築地書館、一九五七・七) 六〇頁。ここでは誤って須走口からの登山として紹介されている。

(26) 板坂耀子『江戸の旅と文学』(ぺりかん社、一九九三・一一) 一九〇頁。

- (27) 板坂耀子「近世紀行文紹介（その七・山岳紀行の部）」
〔福岡教育大学紀要〕第四三号第一分冊、一九九四・二
二九頁。
- (28) 住谷雄幸「江戸時代の山岳紀行―三山（富士山・白山・
立山）紀行を中心に―」（『山梨英和短期大学紀要』第三〇
号、一九九六・一二）一二七頁。

（なかむら・まこと／中部大学非常勤講師）